

プロローグ

「これは…どういう事だ。何故弾が当たらない…。何故後ろにいる私に反応出来る…。私の腕が悪いというのか？そんな…そんな事は…。シヤアなんてもんじゃない…。カミーユ、シロッコ、ジュドーすら太刀打ち出来ないかも知れん…。これが本当のニュータイプというものなのか…。！」

悪寒が全身を貫いた。岩陰に隠れたり、不意打ちで攻撃したりと打つ手は全て打ったが、それがことごとく外されてしまう。全く相手にならないとはこう言う事なのかと彼女は思った。手が震え、額に汗が滲むハマーン。

彼女の心の中に、久しく忘れていた戦場での恐怖が沸き上がった瞬間だった。

(補足事項…この物語は「背徳な戯れ」のサイドストーリーです。本編でのアムロとハマーンは、待ち合わせ場所でナナイと合流するという事になっていますが、その時ナナイが予定通りに来なかったら？という設定です。相変わらず過激な描写もありますが、どうかお楽しみ下さい)

時間を少し遡り、アムロとハマーンがホテルでの行為を終えて、車でナナイとの待ち合わせ場所に着いた所から話は始まる。ところがいつまで待っていてもナナイが来る気配は無く、ハマーンが連絡を入れると、腰が抜けて立つ事が出来ないので、しばらく動けそうもないという事だった。

その原因はナナイと何時間も性行為を行い、何十回も絶頂に導いた自分にあるので、直ぐに来いと命令する訳にもいかなかった。彼女は仕方が無いという態度を示しながら回線を切った。予定が多少狂ってしまう事を残念がる反面、これでアムロと少しでも長くいられるかもしれないという事を内心喜んでもいた。ハマーンは待ち合わせの相手が都合でしばらく来られないと言う事実だけをアムロに説明すると、彼は苦笑しながらもハマーンと共にもうしばらく遊ぶ事を了承したのだった。

*

*

* 繁華街 *

ハマーンは時間を潰す為の場所はないかと辺りを見回すと、近くに大規模なゲームセンターの施設がある事に気付いた。そして、その経営が『アナハイムエレクトロニクス』系列の会社だと判った瞬間、ハマーンの心にある事が浮かびアムロに対してこう言った。

「ねえ……アムロ……」

「なんだい？アル（注…アルという名前はハマーンの偽名。経緯は「背徳な戯れ」を参照の事）」

「あそこで時間を潰そうと思うんだけど……いい……?」

ハマーンはゲームセンターを指差した。

「え？あれかい？」

「そう。あそこって『アナハイムエレクトロニクス』系列の会社が運営してるんだけど、そこにMSの

操縦が出来るゲーム機があるって話なの」

「MSを？操縦？」

「そう。私もまだやった事無いんだけど、本物そっくりに動かせるという話なのよ」

「それって、開発費だけを見積もっても割が合わないだろう。軍事用か何かの転用なのかな？」

「そうみたい。元々は連邦軍が新米兵士を訓練する為のシミュレーターマシンとして作ったらしいんだけど、軍需不況だとか何とかで、それが民間レベルに流れてきた……と言うのは表の話で、実は意図的に流したらしいわ」

「意図的に？」

「そう。今、連邦は造反した軍人が多くてパイロット不足でしょ？だから軍に入る前から操作に慣れて欲しいという理由らしいの。このコロニーには連邦系の人ともよく来るから……。表向きはあくまでもゲーム機だから、ここのお役人も手が出せないみたいね」

「ふくん……そういう時代だから……仕方ないか……」

意外な言葉にハマーンは少し驚いた。

「アムロって、そういうのは嫌いななの？」

その言葉に、アムロは少し寂しそうな表情をしながら言った。

「うん。嫌いとかじゃないんだけど……僕は好きでMSに乗った訳じゃないからね。僕の友達の両親が目の前で殺されて、気付いた時にはガンダムで戦っていたという感じだったから……」

「え？……アムロって志願兵じゃ無かったの？確か以前見た伝記にこう書いてあったわよ『アムロ・レ

イは憎きジオンを倒す為に自ら志願して連邦軍に入隊した。それは彼の強い意志によるものだった』とね」

ハマーンの言葉にアムロは殻笑いをしながら、少し目を逸らして答えた。

「あれは……僕が書いた本じゃないんだ。以前連邦の広報が僕を取材に来て、僕が受け答えした内容を元に作ったプロパガンダ冊子だよ」

「じゃ、内容は……？」

「史実と合ってるのは終戦の時に生き残っていたという所位かな？他はデタラメもいい所さ。それにあの本って戦意高揚を促すような文章ばかり書いてあつただろう？」

「……うん」

「あれは僕を連邦の英雄……救世主に祭り上げたいと思つた連中が、自分達に都合の良い様に書いた本だよ」

「……」

「お陰で僕はジオン系の人にはかなり誤解されてる筈だよ。僕は何度も公式に謝罪して作り直してくれて頼んだんだけど……ね」

アムロの言葉は事実だとハマーンは思った。なぜならアムロが執筆した（と思われていた）自伝を読んだ多くのジオン系の人間は、程度の差はあれ悲しみと憎しみを彼に抱いたからだ。その当事者からの意外な発言にハマーンはふと、こんな質問を試してみた。

「じゃあ、アムロは……ジオン・ダイクン様の考え方は……どう思ってるの？」

「え？うん…そうだ…ね…」

「あつ…ご…ご免なさい…つい…。連邦の軍人さんが軽々しく答えられる内容じゃ無いわよね…」

ハマーン言葉に、アムロは上を向きながらこう呟いた。

「はは、僕はもう連邦の軍人じゃ無いから…アルが聞きたいなら幾らでも話してあげるよ」

アムロは一瞬の間を置いて再び話し始めた。

「僕はね、ジオン・ダイクンの考え方も、ザビ家の考え方も、昔の僕ならともかく今の僕なら評価出来る部分があると思うようになったよ。あ、言って置くけど全部では無いからね。あくまでも部分的な考え方に限定されるんだけど…」

更にアムロは話を続けた。

「それと、僕はシャア・アズナブルがエウーゴの指導者としてダカールで演説した内容については概ね賛成なんだ。ただ彼は理想を実現させる為の方法が判らないというか…自分が汚れ役になる事を嫌っているというか…自分が犠牲になるという選択支を意図的に放棄している感じがする。彼位の地位、立場、能力があれば、もう精神的にも変わっていかねばならない時期な筈なのにね…」

アムロの言葉に、ハマーンはコクリと頷いた。シャアがアムロと同じように物事を割り切って考える事が出来る性格だったら、彼女がこれ程まで苦しむ事は無かつただろう…。

「アムロ…貴方…ただの優しいだけの男じゃないのね…」

その言葉に、アムロは悲しそうな笑顔を浮かべながら応えた。

「そりゃ、優しさや綺麗事だけで世界を変えられるのなら、それに越した事は無いんだけどね」

「貴方って、ジオン出身でも一切差別しないし、優しいだけじゃなくて自分の考えもすっかり持つてるし……」

「ははっ。でも、シャアのように行動を起こした訳じゃない。そう考えると僕は卑怯な人間なのかもね……」

その言葉に、ハマーンは首を横に振った。

「そんな事無いわよ。アムロ……貴方は貴方の考えを貫くべきよ。誰が何と言ってもね。そうすればやがて貴方の考えに賛同する人がきつと現れてくれる筈よ。私が保証するわ」

「ふふっ。嘘でもそう言ってくれと……悪い気はしないもんだね」

「本当の事よ。ああ……もつと早く貴方と会いたかったなあ……」

そう言うと、ハマーンはアムロの耳元でこう囁いた。

「彼女に内緒で……このまま私と付き合わない？体の相性もいいし、必ず貴方を幸せにしてあげるわ」
もちろん現実的には全く無理な話なのだが、半分本気で言ってる事も、また事実だった。

「僕もアルとベッドで交わった時、君が何に苦しんでいるのかは判らないけど、繊細で優しい女性だという事はよく判ったよ。僕はそんな女性はとつても好きだよ。でも……僕は……僕には……」

アムロの表情を見て、ハマーンはハッと我に帰った。そしてこれ以上彼を苦しめたくなくて、ついこう答えるのだった。

「アムロ……それ以上言わなくてもいい……。私が好きなアムロ・レイは、一時の感情で付き合ってる恋人を簡単に捨てる人じゃ無いし、そんな人に体と心を預けたと思いたくないから……」

「……」

「ご免なさいね。わがままばかり言って……あつ、自分でも何言ってるのか判らなくなっちゃった」

「そんな事無いよ……アル。僕をそこまで評価してくれるなんて……嬉しいよ……ホント……」

「でも、私のように言い寄って来る女の人が多かったんじゃないくて？」

その言葉に、アムロは乾いた笑いを浮かべながら答えた。

「噂や興味で近づく人は多かったけどね。でもしばらくするとみんな僕から離れて行ったよ……」

「寂しいわね……」

「うん……。だから……僕は僕の全てを判った上で接してくれたベルトーチカが好きに……」

アムロがそこまで言った時、ハマーンが彼の口にそつと手を当てた。

「お願い……今はその人の事は……忘れて。私の事だけ考えて……私だけを……見て……」

「うん。判った。好きだよ……アル……」

人目もはばからずに、濃厚なキスをする二人。そんな行為をしながら、ハマーンはこう感じていた。

『なんで……もっと早く貴方に会う事が出来なかったんだろう……。この人なら私の理想を実現してくれる為の、真の理解者になってくれたかもしれないのに……』

ハマーンは、敵味方であっても、自分の意志を強く持つてる人がとても好きだった。『私に従わない者は排除する』と言う言葉は、裏返せば『生半可な考えのヤツは反抗するな』という事の裏返しなのだ。ふとアムロを見上げるハマーン。そこには、優しい目で彼女を見つめているアムロの姿があった。彼女の心臓の鼓動が更に激しくなる。

『私がこんなにも心を許すなんて……いつ以来だろう……。ああ……アムロの事がとっても好き。……さつきあんなにしたばかりなのに……またアムロと……結ばれたい……』

そう思ったハマーンは、車をゲームセンターの地下にある駐車場（数階ある内の一番下）へ入れて停めると、辺りに人気が無い事を確かめた。そしてアムロの手を半ば強引に引きながら隅にある身障者用のトイレへと入って行った。

*

*

止められない想い

「よかった……辺りに人がいなくて……」

ハマーンが独り言を言うと、後ろの方でアムロが不思議そうに訪ねた。

「アル……急にどうしたんだい？」

その時、ハマーンがアムロの方へ振り返り、ギョツと抱き付いたかと思うと、おもむろに唇を奪った。そしてアムロの手を、自分の服の中へ滑り込ませて、胸を触るように誘導した。咄嗟の事に一瞬驚いたアムロだったが、頬を赤らめて荒い息をしている彼女を見ると、心の中にドロツとした嫌らしい思いが込み上げて来た。やがて、ハマーンのブラを上にならずらし、優しく揉みながら乳首を軽く摘んだ。

「んっ！……アムロ……気持ちいい……」

妖艶な喘ぎ声をアムロの耳元で囁くハマーン。アムロはやがてハマーンと舌をを絡め合い、抱き締

めていたもう一方の手をハマーンの首筋へそつと這わせ、優しく撫でるのだった。

「あつ……あんっ……」

「アル……僕も……好きだよ……」

「……ここで抱いて……」

「……ここで？」

「ええ、貴方の事を思うともう我慢出来なくて……」

「ふふっ、まだ足りないのかい？」

「うん。もつともつと私を愛して欲しいの……そんな事思うと体が疼いて……」

声がうわずったハマーンが、顔を紅く染めながら囁いた。

「君はベッドよりもこういう所の方が興奮するんだね」

「ええ……そうなの……。私、プライベート生活ってものが無かったから、オナニーはずっとトイレでやってたの……それで……この臭いを嗅ぐと興奮して……。もう私のここ……もう……濡れて……」

ハマーンは、アムロの手を自分のショーツの中へ誘い入れた。アムロは無毛の部分を軽く撫でながら、クリトリスを愛撫し、更にピアスをかき分けてその奥へと指先を延ばした。温かく、十分に濡れた部分に中へ指を一本、二本と入れるアムロ。そして、そのままの姿勢でハマーンのこねくり回すと、ピチャピチャとイヤらしい音が辺りに響き渡った。

「あつ、あつ、アムロ……気持ち……いいっ……ああああ……！」

ハマーンは狭い空間で、不自然な体勢ながらも彼に抱き付き、狂ったように舌を絡めた。やがて、ア

ムロは声が高ぶって絶頂を迎えそうなハマーンの下半身から指を抜いた。

「ああん……もう少しだったのに……」

アムロは、目がトロンとして、火照った表情のハマーンを優しく見つめると、彼女をギュッと抱き締めようと言った。

「ふふっ……可愛いよ……アル……簡単にイかせたりなんかしないからね」

「意地悪〜」

ハマーンはそう言うと、アムロのシャツのボタンを外し、首筋から胸元へかけてキスマークを付け始めた。

「アル……こっ、困るよ」

「ふふっ、寸止めにしてくれたお返しよっ！」

そう言いながらしやがみ込み、アムロのズボンを降ろし、トランクスを下げ、彼のペニスを優しく口に含んだ。

「あっ！……アル……」

「アムロ！好き……大好き……！！！」

アムロのペニスを優しく、そして愛しく舐め回すハマーン。最初は半立ち位の元気しか無かったのだが、やがて少しずつ大きくなっていった。

『ああ……』

時々優しく甘噛みをしたり、尿道口へ舌を押し込む感じで刺激したり、ペニスの先から溢れ出てくる

先走りの液体を美味しそうに飲みながら、自分の下半身をまさぐるハマーン。激し過ぎず、かといって刺激が足りない訳でも無く、徐々に快感を高めつつ、自分の快樂をもコントロールしていた。

どの位そうしていただろうか。やがて、アムロが耐えきれないという感じで言った。

「アル……入れて……いい？」

「うん……来て……」

ハマーンはゆっくりと立ち上がると、アムロに支えてもらいながら、ゆっくりとストッキングとショーツを脱いだ。

「んっ……」

ハマーンは膝上までしかないスカートをたくし上げて、下半身を露わにした。地下駐車場の公衆トイレでの淫乱な行動に、二人の理性はもうどこにも残ってはいなかった。

「早く来て……アムロ……」

「いくよ……」

アムロはハマーンの片足を片手で持ち上げ、立ったまま下から突き上げる感じでハマーンの股間にペニスを入れようとした。だが、体勢が不十分な為か二、三度外れたが、ハマーンの彼のペニスを掴んで誘導する事で、何とか一つになる事が出来た。

「あっ……」

「うん……入った……」

「ん……あっ……」

アムロの胸にしがみ付くハマーン。服越しであるが、彼女の胸の感触を感じたアムロは、鼓動の高鳴りを覚えながら、ゆっくりと突き上げた。どちらかと言えば不自然な状態でのセックスなのだが、そんな状況も含めて二人はそのプレーを楽しんでいた。

「どこか痛くないかい？何なら公園のトイレの時みたいに便座の上でやろうか？」

「ううん。とりあえずこのままでもいい……。なんかとっても淫らな事をやってる感じがして興奮するから……」

「じゃ…もつと激しく動こうか？」

「うん。お願い……。心も体も壊れる位に激しく犯して……！」

「本当に変態だね。アルは……」

「うん。私は……。いつもイヤらしい事を考えて股間を濡らす淫乱な雌犬だから……。そんな私のイヤらしい穴に貴方様の肉棒で栓をしてもらえるなんて、とっても嬉しいっ！うんっ！……ああ…太くてとっても気持ちいいっ！いいのっ！」

ハマーンの熱い吐息がアムロの耳元で聞こえる。アムロはハマーンの片足を抱えたまま、トイレの壁に彼女を押し付ける感じで、何回も激しく腰を付き上げた。時には、ハマーンがつま先立ちになる位であったが、不自然な体勢の為か、ハマーンのアそこから時々ペニスが外れてしまうのだが、その度に体勢を整えて快楽の行為を繰り返した。

どの位たった頃だろうか。ハマーンが快楽に耐え切れないう感じで上半身の服を脱ぎ、ブラを外して洗面台の上に置いた。アムロもそれを見て膝まで降ろしていたズボンとトランクスを脱ぎ、靴下や

シャツも脱ぎ捨てて全裸になった。その姿を見て、ハマーンも更に淫乱さが増していき、便座の上に腰掛けて、アムロに見せるような格好でオナニーを始めた。体から淫乱な臭いを発し、目をトロンとさせながら、快楽を求めて股間と胸をイヤらしい手つきで触っていた。

「……私の嫌らしい姿……どう？…感じる？」

「とつても美しいし……素敵だよ……アル……」

アムロは床にひざまずいて、ハマーンの下半身から流れ出ている愛液を舌で舐め回した。毛の無いその部分は、ピチャピチャというイヤらしい音が辺りに響き渡った。やがてアムロはハマーンの下半身からスカートを脱がして全裸にすると、更にオナニーを続けるように促した。アムロの目の前で再び激しくよがり狂うハマーン。

「あつ！……もつと……気持ちよくて変になりそう……ううっ……」

登り詰めようとする快楽を必死に耐えるハマーンの姿が、アムロにはとても愛しく映った。しばらくそんな行為が続いた頃、ハマーンが快楽の波の中で悶えながらこう呟いた。

「あ……オシッコが出そう……」

下半身を撫でていた手の動きが止まった。それを愛しそうに見ていたアムロが、再びハマーンの前に座り、股間にそつと口を付けた。余りの急な事に驚くハマーン。

「えっ？どうしたの？」

「出しているよ」

その言葉に、見られながら放尿する時とは別の恥ずかしさが込み上げてきた。

「は……恥ずかしいよ……アムロ……」

「君の体から出る聖水……飲ませて欲しいんだ……ダメかい？」

「そんな事は無いけど……。でも……私のオシッコなのよ……いいの？」

「大丈夫。セイラさんとのプレイでよくやってたからね。彼女なんて、セックスの度に僕を便器代わりに使ってたんだよ。僕も世間知らずだったから、セックスってこういうものなんだって思ってた素直に従ってたんだけど、後で本当の事を知って驚いたよ」

兄も変態なら妹も負けず劣らずの変態だな……とハマーンは思った。

「アムロ……貴方も立派な変態なのね」

「軽蔑した？」

「ううん。大好きよ。あつ……出る……」

ハマーンのアそこから、オシッコがチヨロチヨロと流れてくると、アムロはそれを口で受け止めた。やがて量が増えてくると、彼はあそこに食い付く感じで密着して、オシッコが零れないようにゴクゴクと飲み干すのだった。排尿が終わったあそこを優しく舐めるアムロ。そうしているとやがてハマーンが軽い絶頂感を迎えた。

「あつあつ……いつ……あああつっ！」

体の力が抜け、少しグッタリするハマーン。アムロはそれを見届けると洗面台の所に彼女を腰掛けさせるようにして両足を手で持ちながら、再びペニスをゆっくりと挿入していった。

「ああんっ！」

後ろに手を回して体を支えながらアムロのペニスを迎え入れるハマーン。アムロが耐え切れないような感じで叫んだ。

「アル……気持ちいいよ……あぁっ！」

「私も……アムロ！」

ハマーンがアムロにしがみ付いた。アムロはハマーンの足から手を離して彼女の腰に回し、ペニスを奥深くまで何度も繰り返し突きまくった。しばらくその様な行為が続き、やがて……二人にも我慢の限界が訪れようとしていた。アムロのが、快樂の虜となっているハマーンに向かって言った。

「そろそろ……出そう……」

「いいよ……このまま……」

「いいのかい？」

「いいの……アムロのミルク……出して……」

「あぁっ……い……いくよ……」

「うん。私も……イクううう……」

お互いをギュッと抱き締め合いながら激しい絶頂感を迎える二人。その間アムロのペニスからは、大量のミルクがハマーンの中へと注ぎ込まれた。しばらく余韻に浸った後、アムロはおもむろにハマーンの下半身からペニスを抜いた。その瞬間、ドロツとしたアムロのミルクがハマーンのアヌスに向かって流れ落ちた。

「あ……」

ハマーンは思わず手でその部分を押しえた。そしてアムロがトイレットペーパーを持ってくると、反対の手で拭き、ミルクが付着した手はそのまま口元へ持って行って、舌で愛しそうに舐め取った。

「大分薄くなってるわね。水みたいだし、臭いもそんなにしないし……」

「そりゃ、ホテルで沢山搾り取られたからね」

「私の中は、アムロのミルクでいっぱい인데何だか幸せな感じよ。でも連邦の英雄さんはやっぱり絶倫なのね。本人よりもあの本の内容の方が正しいなんて……」

「はははっ、絶倫じゃ無くて君とだったら何回でもしたいと思ってしまうよ。何というか、ニュータイプ同士だからかも知れないけど、心の波長がとつても合うみたいだし……」

「ホント？」

「ああ、脳髓や腰の奥が痺れる位感じてるよ。もうこのままどうにでもなれ！って思う位ね」

「そんなに感じてくれるなんて……嬉しい……大好き！」

アムロに抱き付き、濃厚なキスをするハマーン。そして、彼の耳元でこう囁いた。

「じゃ、もう一回しよっ！アムロ……」

少し驚いた表情で彼女を見つめるアムロ。するとハマーンは拗ねたような表情で言った。

「言った言葉をもう撤回？」

「いや、そんな事はないさ。僕も……まだ……大丈夫……だよ。……だけど少しだけ休ませて欲しいな……」

確かに、言われてみればアムロは肩で息をしていた。出るモノが出る分、体力を使うのだろうとハマーンは思った。

「じゃあ、その間に…」

ハマーンはアムロを洗面台に腰掛けさせて、小さくなっているペニスを優しく口の中に含むと、尿道に残っているミルクをそっと吸い出し始めた。

「あっ！く…くすぐったいよ。アル…」

「ゴメン。でも、今は貴方に尽くしたいの…たぶん…もう会えないだろうし…」
「……」

アムロはハマーンの頭ををそっと撫でた。彼女の心の中にアムロの優しさが伝わってくる。十代前半の頃の、好きな人が側にいてくれさえすれば、それだけで幸せだった頃の様な感覚を二人は感じていた。やがて、アムロの精力が回復してきた頃、二人はどちらからともなく体をまさぐり合いながら、再び快楽の中に身を委ねていった。まるで二匹の淫乱な獣のように……。

*

*

ゲームセンター

どの位経った頃だろうか。行為を終えた二人は、辺りを見回して誰もいないのを確認すると、急いでエレベーターの前に走って行った。そしてボタンを押した後も、辺りに誰かいやしないかと、ずっとそわそわしながら待っていた。やがてエレベーターが降りてきて、中へ乗り込もうとした時、中から掃除用具を持った年輩の女性が出てきた。どうやらこれからトイレの掃除をするらしかったので、二人は安

堵の表情を浮かべながらすれ違おうとした時、その女性がぽつりと呟いた。

「あんたら、若いから仕方ないけど、声だけは抑えながらおやりよ」

扉が閉まる瞬間にその女性が振り向き、一瞬二人と目が合ったのだが、年輩の女性は『若いって羨ましいねえ……』とでも言いたそうな表情をしていった。アムロとハマーンはその瞬間、こんな言葉が頭の中を駆け巡った。

『聞かれていた……！』

上昇を続けるエレベーターの中で、心臓をバクバクさせる二人。たぶん、その方は掃除をしに来た時、中でハマーン達が性行為を行ってる事を知り、半ば呆れながらも別な仕事を済ませてから再び掃除をしの戻って来たのだろう。やがて、胸の鼓動が収まってきた頃、アムロがぽつりと呟いた。

「公園で君に『公衆の場でそういう事はお薦めできないな』って偉そうな事行っただけになあ……」

「あの人、貴方が『アムロ・レイ』だって知ったら、どういう顔するかしら？ゴシップ誌に情報が流れたらホント、大スクープになるわね」

「その時はその時だよ。でももしそうになったら、君と無人島で暮らそうかな……」

「ふふ。言葉の最後が弱々しかったわよ」

ハマーンはそんな人生も悪くないと思った。とは言え、実際この行為が公になったり画像でも撮られていて流出でもしたら、アムロどころか自分の立場すら崩壊してしまう事になりかねなかった。それどころか歴史に残る大スキャンダル事件となりうる可能性すらあった。もしそうだった場合のゴシップ誌の見出しは『連邦の英雄とネオ・ジオンの指導者が遊技場の地下で変態性行為！？』こんな感じだろう

とハマーンは思った。そんな事を考えた時、ハマーンの下半身がジュンと濡れていくのが感じられた。シヤアによって徹底的なマゾ女に調教されていたハマーンは、屈辱的な行為には無意識に感じてしまう体になっていたからだ。

『ホント、変態なんだな……私……』

アムロに寄り添いながら、ハマーンは複雑な表情を浮かべた。

やがて一階に到着し、扉が開くとそこはもうゲームセンターの中に通じていた。フロアはかなり広く、最新型から旧式のゲームまでありとあらゆる機械が設置されていた。

そんな中で、かなりのフロア面積を専有しているのが、MSシミュレーターマシン「MSF」であり、連邦、ジオン型のコックピット（注…全方位型では無く、旧式の限定型）が各五台ずつ設置されていた。

プレイヤーは開始前にフリーモードで参戦するか（その場合、他のゲームセンターに設置されている機械で参戦している機体や、コンピューターが操作する機体が入り交じっての乱戦となる）、コンピューターと戦うミッションモードで参戦するか、あらかじめ決めた仲間だけで行う対戦モードの三種類が選択出来た。勝敗はフリーモードとミッションモードが自機が破壊されるまで、対戦モードは三回戦でどちらかが二回勝つまでとなっていた。

また操作に関しても、実機と全く同じ操作が出来るマニュアル形式から、ある程度コンピューターが補助してくれるオートマッチク形式の二種類が用意されていた。更に戦闘は本人の了承があれば観客にも設置されている巨大モニターで公開出来るのだが、軍人が休暇中のお遊びで行っている事も多く、ゲーム中であるにも関わらず、画面にアナハイム社のコマースヤルが流れている事も結構多かった。

アムロとハマーンは、待合い場所に置いてあるゲームの説明書を読みながら、自分達の番が来るのを待っていた。その間、説明書を真剣に読みふけるアムロに対してハマーンが言った。

「どう？元パイロットから見てこのゲームは？」

「どうって……これ……軍に置いてあるシミュレーターマシンそのものだよ。もったも、全方位モニターじゃ無いから旧式のシステムなんだけど……」

「アムロはどっちが好きなの？」

「僕はこっちの方がいいかな……乗り慣れてるからね」

話を返しながらも、アムロの目は説明書に釘付けだった。そんなアムロを見つめながら、ハマーンはそつと口を開いた。

「アムロ……私の最後のお願い……聞いてくれる？」

「なんだい？アル……」

「私と……このゲームで対戦して欲しいの……」

急な話に、アムロは半分驚きながら答えた。

「え？僕と？まあ……それは構わないけど、僕の戦闘を見たいだけならモニター越しの方が……」

その言葉に、ハマーンは一瞬躊躇したが、意を決して話し始めた。

「……話してなかったけど私……一年戦争時はジオンのパイロット候補生だったの……」

「え？」

アムロの表情が、驚きが変わった。

「ニュータイプの素質がある私を、軍が放っておかなかったって事」

「じゃあ……ララアと会った事は？」

「ララア？ああ、ララア・スン様ね。あの方とはニュータイプの研究所で何回か会った事があるわ。話した事もあるけど……どんな内容だったかは忘れちゃったわ」

現在の立場や自分の本名を話の中でを上手くぼかしながらも、淡々と自分の過去を話し始めるハマーン。

「……で私はニュータイプの訓練がメインだったから、MS自体の操作はそんなに上手くないと思うけど、アムロとお手合わせ出来るんだったら、やっぱり戦ってみたいと思うの……。連邦の英雄さんの腕前がどれ程のものなのかずっと気になってたから……。それにゲームなら負けても……。死ぬ事は無いし……」

その瞬間、アムロの目が一瞬変わった事をハマーンは見逃さなかった。アムロがハマーンの目を見ながら、とても寂しそうな表情で言った。

「そうだね……。戦場で会うよりは……」

「アムロ……ララア様の事……もつと聞きたい？」

「いや……もう充分だよ。最近やっと吹っ切れてきた所だから……」

「それはもうララア様の事を忘れたらという事？」

「ううん。ララアとの出会いはとっても大切な事だったけど、生きてる内は僕に出来る事をやらなきゃならないって事だよ。ララアとはいつでも遊べるけど、今の僕だから出来る事ってのもあるからね……」

例えば君の心を癒すとか……」

「!!!!」

アムロの言葉に、ハマーンは胸の鼓動が再び高鳴るのを覚えた。これ以上アムロといれば、自分もつと彼の事を好きになり、誰にも渡したくなくなるばかりか、これから訪れるであろう自分の運命にも巻き込んでしまう事にもなるのだ。また、彼女はシヤア・アズナブルと一生の忠誠（主従関係）を誓っている身である事から、彼以外との男性と必要以上の関係になる事もまた出来ない事だった。それは拘束力の無い口約束なのだが、ハマーンにとっては神との契約に等しい言葉だからだ。今の彼女は神との契約に背いて背徳な行為を行っている……その行為にすら精神的快楽を覚えるシヤアへの忠実な変態牝奴隷なのだ。

「アムロ……たぶんアムロが私を気に入ってくれるのは、私の心の中にララア様の面影と、セイラ様の面影を見てるからだと思うわ……」

ハマーンはその言葉の後に心の中で『シヤアと同じように……』と続けた。シヤアならここで否定する所なのだが、アムロの反応は少し違った。

「アル……男って生き物は確かに印象に残った女性の面影をずっと引きずってしまう傾向があるみたいなんだ。確かに君にそれを全く感じなかったかと言えば……ゴメン……。本当は嘘でも『そんな事無いよ』って貫き通せればいいんだろうけど、僕は嘘が付けられない性格だから……」

その言葉を聞いて、ハマーンの表情が少し和んだ。

「私の場合、信じてた人に裏切られた事があるから、貴方の様にはつきり言ってくれる人が好き……」

「ふふっ。ありがとう。あっ、でも君がとっても魅力的な女性だって事は嘘じゃないよ。もし許されるのなら君と一緒に同じ時を過ごしたいって思ってるし……」

「今日会ったばかりなの？」

「これでも人を見る目は有るつもりだよ。アル」

優しくハマーンを見つめるアムロ。そんな時ゲームが終了して数人がプレイ可能とのアナウンスが会場内に流れた。今なら連邦、ジオンの機体どちらでもプレイ可能らしい。

「プレイ出来るって。やりましょ」

「余り気が乗らないけど……君が望むのなら……」

「じゃあ、もしアムロが勝ったら、私の事もつと教えてあげるわ。私の感じる部分とか……ね」

「ふふ、楽しみにしとくよ」

そう言いながら、二人はゲーム機の前まで行き、簡単な手続きを行った。ルールは二人だけの対戦プレイで、観客へのモニター中継は無く、地上戦が一回の、宇宙戦が二回という事にした。その他細かい条件は、選択した機体によって自動的に調整されるらしい。

「アムロはどの機体で戦うの？やっぱり連邦系？何ならジオン系のMSに乗ってみる？噂よりもずっと扱いやすいのよ」

ハマーンが自信ありげに言った。

「そうだな。でもやっぱり乗り慣れたあの機体を使わせてもらおうよ」

「じゃあ、私はジオン系の機体で戦うわね。あ、それと戦闘中に選択した軍内で使用しているMSにチ

エンジン可能だから、もし性能的にダメだと思ったら……」

ハマーンの言葉に、アムロはこう答えた。

「MSの性能差が戦力の絶対差では無いよ。アル」

「ふふっ、その言葉、覚えておくわ……」

ハマーンはそう答えると、ヘルメットを装着してジオン系MSのコックピット内へ入っていった。その時アムロの目は、一年戦争時によく目にした兵士の乾いた目になっていたのだが、当然の事ながら気付く筈は無かった。

こうして、歴史に残らない戦闘の幕があいた。

*

*

アムロ…再び…

「この感触……久しぶりだな……」

全方位モニターとは違い、限定されたモニターに表示される映像を眺めながら、アムロは久しく忘れていた感覚を思い出していた。

選択したMSはRX-78タイプ。彼が使用していたガンダムだが、地上戦という事で、あえてマグネツトコーティングは無しという設定にした。武器もビームサーベルとバルカンは使用可能なものの、ビームライフルの残弾が最初通常表示だったのが、二発分に減っていた。これは、相手（ハマーン）が選

択した機体との調整の為という表示がモニターに映った。

「成る程、こういう事か……さて、アルは一体何の機体で出てくるんだろう」

相手の機体の種類は、モニターに表示させる事が可能なのだが、アムロはあえてそれをしようとはしなかった。そんな事をあれこれ考えていると、通信回線から、その昔よく聞いた声が響いてきた。

「アムロ。準備は良くて!？」

ハッと耳を疑い、オペレーターが表示されているモニターを見ると、画面ではセイラ（注…厳密には再現されたCG）が当時と同じ姿、同じ声で今回の作戦を説明していた。どうやら『アムロ』という名前は、ガンダムを選択すると自動的に選ばれる名前らしい。アムロはそれを懐かしそうな気持ちで眺めていた。すると、セイラが当時と同じきつ目の口調で言い放った。

「これで終わりだけ……聞いてるの？アムロ？」

アムロが驚いて黙っていると、画面に『何かメッセージを発して下さい』という文字が現れた。戦闘を真似てはいるが、これはあくまでもゲームなのだ。アムロは少し笑みを浮かべながら、こう答えた。

「大丈夫ですよセイラさん」

すると、画面のセイラが笑顔を浮かべながら言った。

「そう。アムロなら出来るわ。頑張つてね……」

その言葉を聞いたアムロは、当時に戻ったかのような感じで、レバーを握りしめてこう叫のだった。

「ガンダム。出る！」

ホワイトベースのカタパルト（の画面）から、当時と同じように再現されたガンダムが勢い良く飛び

出した。最初の舞台は中東の砂漠地帯……。

*

*

ガンダムVSグフ

「どこだ……彼女はどこにいる……」

地上に降り立ったアムロは、モニターで常時確認しながらもセンサーが鳴るのをじっと待っていた。相手が待ち伏せしている可能性がある以上、下手に動く事は自殺行為に等しいのだ。その間、彼は舞台の地図を画面上に映し出して場所の把握に務めていた。どうやら場所はランバ・ラルのグフと戦った中東の砂漠地帯らしかったが、演出上実際には無かった遺跡が点在しており、岩場のような身を隠せる場所もあちこちにあった。

「まあ……そのまま再現してもゲーム的には面白く無いだろうし……仕方が無いって所か……」

思わず苦笑するアムロ。と、その時、右側の警報機がけたたましく鳴った。

「来た！」

アムロが振り向くとマシンガンの弾が飛んできて装甲に当たり跳ね返った。慌てて照準を合わせると既にMSの姿は無かった。しかし、アムロは素早く立ち去る青いMSの姿をはつきりと目撃した。

「あの色は……グフか……。くそっ、どこにいる……」

ビームライフルを構えながら、先程反応した場所からは見えない位置に移動して、再びじっと待つア

ムロ。

『相手がグフならこっちはロングレンジで待ってればいい。僕と戦いたいと言ってきた以上、必ず彼女の方から出てくる筈。その時を狙って叩けばいいだけだ』

数々の修羅場をくぐり抜けてきたアムロは、ゲームとは言えあくまでも冷静に対処していた。所詮本物の戦闘では無い訳であり、少々の被弾は覚悟した上で大味な戦闘戦を行う事も可能だったし、実際にはそうやって戦闘をする者の方が多かった。だが、それでは真剣に戦いを望んだ彼女に対して失礼であるとアムロは思っていた。ハマーンもそう考えていたらしく、迂闊な攻めは全くと言って良い程してこなかった。

その頃グフのコックピットでは、ハマーンが正面モニターに可能な限りの戦闘パターンを表示させて成功の可能性を模索していた。しかし、その結果はいずれも「敵のビームライフを回避してから」という前提条件を示していた。

『やはり格闘戦に持ち込まないとガンダムには歯が立たないという事か……。もともと、そんな事は承知でこの機体を選んだのだから仕方が無いが…』

彼女の心に、ある日の光景が浮かび上がった。

一年戦争時のある時、ハマーンは姉と共にドズルが指揮する司令部を慰問した事があった。その時、ドズルは忙しい中でも時間を見付けては話し相手になったり、内部を案内したり、目をかけている部下を紹介してくれたりしていたのだが、通信兵が走り寄り、ドズルに何か二言三言告げると、それまで穏やかだった表情が一変した。

「それは……事実なのか？」

「はい……何度も確認を取りましたが……残念ながら……事実です」

「そうか……判った」

一礼をして足早に持ち場へ戻る通信兵を見ながら、天井を向きながら何か考えていたドズルだったが、やがてハマーン達の方を振り向くと、精一杯優しい表情を作りながらも穏やかな口調で言った。

「すまんが用事が出来ちまって……。わしはこれから部屋に戻らなければならん。後の事は部下に頼んでおくからゆつくりしていつてくれ……。すまん」

若いハマーンにはその言葉の意味が判らなかったが、彼女の姉は全てを察したかのように、こう応えた。

「判りました。さっ、司令部に戻りましょう。ハマーン」

「はい。お姉様……」

ハマーンは不思議そうな顔でドズルを見上げると、彼は何も言わずに優しく頭を撫でてくれた。その時、ハマーンの心に悲しみの波長が流れ込んできた事を、彼女は今でもはっきりと覚えていた。

後に、ハマーンはその時ドズルと通信兵の会話が、ランバ・ラルの戦死の報告だった事を病床の姉から聞いた。また、姉はその後落ち着いた頃を見計らってドズルの様子を伺いに行ったのだが、部屋でグラスを傾けながら、ランバ・ラルの為に背中を震わせながら男泣きをしている姿を見て、彼を更に好きになったという事も、まるで昨日の事かのように嬉しそうに話すのだった。そしてランバ・ラルと戦った相手が、連邦の木馬であり、ガンダムであり、そしてガンダムのパイロットが連邦の英雄であるアム

ロ・レイだという事も……。

接近戦に持ち込みたいグフと、それを許さないガンダムの攻防戦は、岩や遺跡を挟んで散発的ながら繰り返された。ハマーンとしてはガンダムのビームライフルの弾切れを狙っており、岩を投げたりして陽動を行ってみるのだが、それに吊られて無駄な射撃を行うアムロでは無かった。状況を素早く判断して直ぐに物陰に隠れて次の攻撃に備えるという行動は、数々の戦いを経験してきたからこそのものでだろう。

ガンダムにこのような行動を採られては、市街戦や密林でも無い限りグフには辛い状況が続いていた。実戦なら仲間がいて援護射撃をしてくれるのだろうが、これは不利を承知で挑んだ戦いなのだ。愚痴を言う位なら最初から戦わなければ良いだけの話なのだ。『生き残る為には最大の努力をするしかない』これは一年戦争時にハマーンが無名のパイロットから聞いた言葉である。

このゲームは、機体が三分以上停止しているとディスプレイに『戦って下さい』と警告が流れるのだが、先程からその表示が『これ以上戦闘を継続しない場合は戦闘継続不可能と判断してゲームを中止します』という文字に変わった。アムロがそれに苦笑していると、対戦通話機能を示すランプが点滅した。(注…これは当然実機には付属していない機能)アムロが回戦を開くとハマーンの声が響いた。

「アムロ、中止になっても困るから、一気に決めるわよ」

「それは構わないけど、グフは接近戦にならないとかなり辛いぞ。とは言え僕は君をヒートロッドの射程内に入れるつもりは無いよ」

「それでこそ戦い甲斐があるわ。じゃ……」

そう言うと、回戦を閉じるハマーン。その直後、アムロのコックピット内に再び警報が鳴り響いた。慌てて各モニターを見回したが、それらしい物体は見当たらなかった。やがて目標を察知したコンピュータが、敵の位置を割り出した。ガンダムの真上数十メートル。

「真上か！」

アムロはビームライフルを敵がいると思われる方向へ向けようとした。すると、太陽の位置と重なり、眩しくて目標が特定出来なかった。

「くそっ！！」

アムロは咄嗟にバルカン砲の引き金を引いた。すると、空中でグフが撃ったマシンガンの弾と当たり、激しく飛散した。その場に立ち止まるのを危険と思ったアムロが機体を移動させてライフルを構えようとしたその瞬間、減速無しで突っ込んで来たグフが、ヒートサーベルをガンダムめがけて振り下ろしてきた。

「ああああっ！！！」

盾で防御しようとしたアムロだったが、一瞬の判断の後に盾をグフに投げ付け、直後にバーニアを一気に吹かして体当たり行動に出た。意表を突かれた行動に驚きの表情を浮かべるハマーン。

「なっ！何だと！」

慌てて左手のマシンガンを撃ちながら、間合いを取ろうと後方へ退こうとした。その瞬間ガンダムのビームライフルがグフの左肩付近を貫いた。一瞬の隙をアムロは逃さない。

「くっっ！」

グフのコックピット内部で警報がけたたましく鳴り響いた。『左肩動力部破壊！爆発の可能性は低いが重大な事故に繋がる可能性有り』モニターに赤い文字で警告が表示された。

「なんの！まだ！まだ戦える！ザクとは違うからなっ！！」

地面に着地して体勢を整えると、バーニアを吹かしてヒートサーベルを突き刺そうと突撃するハマーン。アムロはビームライフルの照準を合わせてグフを撃とうとしたが、その時足場が悪く一瞬バランスを崩してしまった。運命の女神は一瞬ハマーンに微笑んだ。

「！！」

必死に体勢を立て直し回避行動を取ろうとしたアムロだったが間に合わないと思わず、ビームライフルを持った手を自らヒートサーベルに向けて突き出した。ヒートサーベルがガンダムの右手の甲の部分から一気に肘の部分まで刺さっていく。腕の回線がショートして激しく火花を散らす。アムロの絶叫が響き渡った。

「まだまだっ！！！」

ビームライフルのエネルギーによって右手が誘爆するガンダム。それを見てハマーンの気が一瞬緩んだとしても仕方が無い事だろう。その瞬間、アムロはガンダムの右腕を肩から外して体勢を左側に傾けると、左手でビームサーベルを抜きグフのコックピットに横から突き刺した。

「なっ！何！！」

ハマーンは一瞬何が起きたのか理解出来なかった。手傷を負わせたと思った瞬間にガンダムが視界から斜めに消えた……その直後、勝負は一瞬にして決まったのである。

「ふう。間一髪だったな……」

アムロはバーニアを吹かして安全圏まで逃げると、背を向けて爆風から守る態勢を取りながら安堵の表情を浮かべた。その直後、グフが大爆発を起こしてこの戦いは幕を下ろした。戦場では一瞬の気の緩みが命取りになるという事と、どんな状況に陥っても出来る事は全て行うという思考の柔軟性が勝敗を決めたと言える。

ハマーンは確かに能力的には優れたモノがあるのだが、実戦経験、それも接近戦での戦いは初めてと言つてよかった。ファンネルを使う戦闘になればまた違う結果になったのだろうが、アナハイム社のゲーム機でそれを求めるのは酷というものだった。やがて通話機能のランプが灯ったので再び回戦を開くと、ハマーンの残念そうな声が聞こえた。

「……やっぱり実戦を経験してる人は違うのね……。私、ガンダムの右手を破壊した時一瞬気を抜いてしまつて……まさか肩のジョイントを外して回り込むとは思わなかったわ」

「MSは生身の肉体と違うからね。人が想像する事以上の動きをすれば、今回のように絶体絶命の時でも何とか対処出来る事もあるんだ。人間は慣れてないとそう言う時は思考が一瞬混乱するから……」

「ええ、一瞬何が起きたのか……」

「こればかりは経験を積むしかないし、その為のシミュレーションだから……」

「ええ、とつても勉強になったわ。でも、次は負けないわ」

「ふふつ、こつちも更に真剣にやらせてもらおうよ」

アムロはそう言うと同戦を閉じた。次の戦闘開始まであと五分……。その間、彼は何をするでもなく、

静かに瞑想の中に浸っていた。今回の戦闘ではあえて使わなかったニュータイプ能力を呼び覚ます為に……。

そして、次の宇宙戦でハマーンはかつて無い程の恐怖を知る事となった。

*

*

戦慄の空間

ジオン側のコップピットの中は、アムロとの回戦を切ったハマーンが会話中の元気な発言とは裏腹に、体中から脂汗を流して、やや青ざめた表情のまま心の底から沸き上がってくる恐怖に震えていた。

『……やはりグフではダメだったか……。ラル：そしてドズル様の無念を少しでも晴らせたらと思ったのだが……慣れない機体で戦って勝てる程甘くないって事か。だが……ジオンの兵士達はこんな男と戦っていたのか……シヤアが勝てないというのも判る気がする……。しかし、この震えはなんだ……この汗は一体何なのだ……この私が恐怖に震えてると言うのか？……シヤアやシロッコ、カミーユすら怖くなかった私が……恐怖に震えてると言うのか……？』

ハマーンは自問自答を繰り返していた。彼女は反射能力においてはかなりの自信があったし、アムロと話していた程は油断などしていなかったのである。MSは多かれ少なかれセンサーの死角が存在するのだが、アムロの行動はグフの側面にあるセンサーの死角を知ってそこを狙ったとしか思えない攻撃だった。そうしていると、戦い時間を示すブザーが鳴った。ハマーンは次の機体としてアステロイドベル

トにいた頃、散々搭乗してて練習した上に、シヤア以上に機体の性能を知り尽くしたゲルググを選択した。隊長機用の角を付け、機体の色を赤くして……。そうすると……。

「シヤア大佐。準備完了です！」

コックピット内のモニターに、ジオン兵士からの通信が入った。どうやら赤のゲルググで出撃すると発せられる言葉らしい。ハマーンはそれに少し苦笑しながらも、どこか嬉しい気持ちになった。そして、洒落でこう言った。

「シヤア・アズナブル。ゲルググ。出るぞ！！」

ハマーンが乗るゲルググが、モノアイの動きを確認した後、ゆっくりとした動作で出撃した。ハマーンは相手の出方が全く判らない為、ムサイ艦の側にいて、そこから随時情報を得るという作戦にでた。彼女はムサイのオペレーター（画像はCGで声はコンピューターが答えている）に、こう話しかけた。

「敵の情報は無いか！？」

「今の所はありません。レーダーにも反応無し」

「油断するな！敵は白いヤツなんだぞ！」

「白いヤツ？ああ、あのガンダムとかいうMSですな。はははっ、シヤア大佐ともあろうお方が……」
その時、ムサイのレーダー担当者が叫んだ。

「下右二時の方向、高熱源体確認！！高速でレンジⅢを突破！レンジⅡに進入……！！！」

その直後、ディスプレイ内の艦橋が真っ白に光ったかと思うと、下弦から一瞬の閃光が矢のように貫いた。

「何っ!!!!」

ハマーンは咄嗟にバーニアを吹かし、回避行動を行った。すると直後に第二、第三の閃光がムサイのエンジン部分を貫いた。あつと言う間に大爆発を起こして四散するムサイ。

「ア・アムロか!?」

ハマーンはゲルググを回転させて、攻撃してきた方向が正面になるように体勢を入れ替えた。すると、蓮か遠くから白い閃光がこちらの方に高速で接近してくるのが見えた。

『あれか!』

ハマーンは浮遊している岩礁に身を隠し、アムロの機体のデータを照合してみた。

「機体……RX'78……初……初期型ガンダムだと!?ゲルググ相手にマグネットコーティング無しで戦うというのか!?舐めた真似を……」

ハマーンは出来るだけ身を潜めながらビームライフルの標準をガンダムに合わせた。敵が全くこちらを警戒していないと判断したハマーンは、狙いを定めてトリガーを引こうとした。するとその動作とほぼ同じタイミングでガンダムが回避行動をとった。

「!」

ビームライフルの閃光がガンダムのいた場所を無情にも通り過ぎた。と、その直後、ガンダムは反転しながらハマーンがいる方を一切確認して無いにも関わらず、正確に照準を合わせてきた。

「まずいつ!」

咄嗟に岩陰に隠れると、ガンダムが撃ったビームライフルの弾が、先程までゲルググの顔があつた場

所付近の岩に当たって飛散した。ガンダムはこちらの方を全く見てなかった筈なのだが、明らかにゲルググがいる場所を把握していた……。

『そんな筈……!!』

ハマーンは、先程とは別な位置からガンダムを確認しようとした。岩場からゲルググの顔を見せた瞬間、ガンダムが再び同じタイミングで別の岩陰から上昇し、再びビームライフルの標準を合わせてきた。

「なにっ!!!」

慌てて必死にゲルググを操縦して回避行動をとるハマーン。それを逃がすまいと追い駆けるアムロ。逃げる合間にも、ハマーンは標準を必死に合わせながらビームライフルを撃つて威嚇した。しかしガンダムは紙一重の所で避けながら、確実に迫って来た。ハマーンもゲルググに関してはシャア並、いや彼以上の腕前で操作することが出来た筈であり、更にこのゲーム内で操縦するタイプは実機よりも反応速度や推力が水増しされているのだ。つまり性能面だけで言うならばマグネットコーティングすらされていない初期型ガンダムなどは相手にならない筈なのだ。ソフト面とハード面、どちらも最高の状態で挑んでいるにも関わらず、全く歯が立たない状態が先程から続いていた。

『なぜ私の攻撃がこうも読めるのだ。いかにアムロがニュータイプと言えども、これはゲームなんだぞ。反射神経が良いというだけでは説明が付かん!!』

ハマーンが言う通り、これは本当の意味での実戦ではなく、あくまでも映像の中で具現化されている物が画面に映し出されているに過ぎないのだ。つまり実際には存在していない電脳空間の距離にいる敵をなぜ正確に予知出来て反応する事が出来るのか、ハマーンはどうしても判らなかつた。結局その答え

は『ニュータイプだから』という事になるのだろうか、彼女は頭の中を覗かれたような気配は一切感じておらず、この様な彼女の想像の範囲を超えるレベルの相手と戦う事自体、初めての体験だった。

『なんで実戦のような行動をとる事が出来る……なぜそんな機体でその動きが出来る……!!』

そう自問自答しながらも、コンピュータにも予想が出来ないような複雑な動作と、それに全く意味のない動作を巧みに交えながら、必死にガンダムに向けてビームライフルを撃つハマーン。しかし、ガンダムは宇宙空間という全方位に自由に動ける条件をフルに活用して回避し、そして正確に反撃してきた。上かと思えば下、右かと思えば左、それもハマーン自身が複雑な動きをしているのである。仮にハマーンが後ろや、下といった人間にとっては死角となるような所へ瞬時に回り込んでも、人間以上の角度で曲がる腕や体をも自在に使いこなして、確実にゲルググを追い詰めていた。

『何故当たらない……何故……』

ハマーンは、アムロの底知れぬ能力の高さに、地上戦の時以上の戦慄を覚えていた。これではシャアはもとより、シロッコやカミーユ、ジュードでさえも、今のアムロの前では歯が立たない事であろう。そこでハマーンは屈辱を覚悟で、アムロに対して機体交換の許可を申請してみた。このゲームでは、戦力差が有り過ぎる場合、一試合につき一回だけ、相手の許可の下で機体を乗り換える事が出来るのだ。しばらく待つと正面のディスプレイ上に、『対戦相手が貴方の申請を許可しました』というメッセージが現れた。ハマーンはリストに載っているジオン系のMSの中で、最高機種であるガルバルディーを選択した。(注…ジオングはサイコミュ搭載マシンである為、民間タイプでは使用出来ないという条件になっている)

機体がゲルググからガルバルディーに変わり、操作も反応速度も格段に上がった……筈なのだが、なんとガンダムの方も先程以上の動作で攻撃してきた。

『なんだ…なんだというのだ……今まで手を抜いていたというのか!?!』

必死に逃げながらも反撃を試みるハマーン。しかし、先程以上にガンダムの動きが予想出来ないのだ。人はそれぞれ固有のリズムを持っており、疲れた時などはそのリズムパターンで無意識に行動してしまう事がある。また、動作と動作の合間に、一瞬動きが止まる時があり、それらの瞬間が攻撃する側としては絶好の機会となるのであるが、アムロの場合はその二つが全くと言って良い程無かったのだ。絶えず停止状態が出ないように動き回る上に、そのパターンもランダムで、しかも相手のパターンを読んで攻撃してくる……。

『キシリア様がニュータイプを戦争の道具として使いたかった筈だ……』

その時ガルバルディーの右肩にビームが一発命中した。アムロは一気に勝負を決めるつもりらしい。「がっ!!」

回避行動をとる間も無く、更に一発左足に命中した。更にもう一発が頭部に命中して破片が粉々に飛び散った。その際、激しい衝撃（注…加速度の再現は無理だが、ある程度の衝撃はコックピットを揺らす機能があるので再現可能）がハマーンを襲った。そして反撃しようとした彼女が正面のモニターで見た最後の映像は、ガンダムがガルバルディーの間近で、ビームサーベルを突き刺そうとする光景だった。その直後、ガルバルディーのコックピット内を白い閃光が包み込んだ。手応えが有った事を確信すると、アムロはビームサーベルのエネルギーを素早く遮断してその場から離脱した。

激しい光と衝撃が辺りに伝わっていった。この瞬間、戦闘はアムロの勝利に終わった。コックピット内が明るくなり、出入り口のハッチが開いた。アムロは、普段よりも少し疲れた様な感じで降りてきたが、精神的にも肉体的にも憔悴し切ったハマーンは、しばらくその場から立ち上がる事が出来ず、係員に手伝って貰ってやっと降りる事が出来た。

*

*

戦い終えて…

「ふう……やっぱりまだ感が戻ってないな……どうしても計器に頼ってしまう時がある……」

アムロがゲームセンター内にある休憩用イスの上で缶コーヒーを飲みながら独り言を言っていると、トイレから戻ってきたハマーンが疲れたような足取りで側に座った。優しく声をかけるアムロ。

「大丈夫かい？アル？」

「ええ……何とか……」

ハマーンは軽く笑みを返して反応すると、力無くアムロにもたれ掛かった。余程精神的に疲れたらしい。

「満足したかい？」

「え？そつ……そうね。でも……」

「でも？」

「本音を言うと戦わなければ良かった……と思ったわ。まさかこんな一方的な展開になるなんて思わなかった……」

「ははは、それは経験の差が出たんだよ」

「私の弾をほぼ全部避けた事も経験の成せる事なの？」

「そう。戦場では何度も死にかけてからこそ出来る事だよ。あ、でもあのお陰かもしれないな……」

アムロの言葉に、ハマーンは不思議そうな表情で言った。

「あのお陰って……何？」

「ほら、聖なる水は敵を寄せ付けないって言う話……聞いた事無いかい？」

「聖なる水って……あっ!!」

ハマーンがその事を思い出したその時、アムロが耳元でそっと囁いた。

「君の聖水のお陰だよ。きつとね」

「ば……ばかっ！」

顔を赤くしてそう言い放つハマーン。アムロは冗談だよという表情をしながら話しを続けた。

「はははっ。でも君を失望させないようにって必死に回避してたんだよ。だってそうでもしないと『連邦の英雄』の名前を返上しなければならぬからね」

ハマーンの為に、あまり好きではない言葉であつても会話に入れて話すアムロ。

「……」

そんな謙遜混じりの言葉に、ハマーンは実は自分も現役のMSパイロットだと言おうとしたが、そん

な事を言っただけで張り合っても何の意味も無い事を悟って黙っていた。すると、アムロはハマーンが落ち込んでいると勘違いしたらしく、慌ててこう言った。

「あ……その……君もニュータイプだし、戦闘の素質は充分あると思うから、実戦を積み始めればすぐ僕なんか追い越すと思うよ。もつとも、戦場で君の姿は見たくないんだけど……ね」

今の言葉は、アムロなりの優しさの現れだった。慌てて話を合わせるハマーン。

「そつ、そうね。ジ……ジオン軍から開放されて良かったって事かしら？」

「そういう事。君にはこういう普通の生活が似合ってるよ。アル」

「うん。ありがと……。アムロ」

アムロの屈託の無い笑顔に、ハマーンの心は先程からずっと痛みつばなしだった。シャア達とは違い、自分の心を素直にさらけ出してた上で、優しく気遣ってくれる……。それに対して自分は身分を隠しているばかりか、本名すら明かしていない……。アムロをシャアと同じ位好きになってしまったが故の悩みだった。そうしてしばらくの間戦闘の余韻で疲れた体を癒していると、ハマーンがポツリと言った。

「アムロ……答え辛い事を聞くけど……今でもMSに乗ってるでしょ？」

「どうしてそう思うんだい？」

「あの動きは何年もMSに乗ってない人が出来る事じゃないわ。それに、貴方の目には時々優しさの影に飢えた野獣の目が見えるわよ」

「そりゃ気のせい……って言いたい所だけど、君の前で嘘は付けそうも無いな。詳しくは言えないけど確かに乗ってる事は乗ってるよ」

「そうなんだ……やっぱり戦場に出てるんだ……アムロ……」

「でも本音を言えば、僕はもう戦いたくは無んだけどね。人の最期の思念が頭の中に入ってくるのは、余り良いものじゃ無いから……」

「……そうね……」

ハマーンは『その気持ち……よく判る』という言葉を飲み込んだ。そうしていると、今度はアムロがハマーンに向かってこう言うのだった。

「アルこそ……操縦が久しぶりって訳では無いよね……」

「……うん……」

沈黙の時間が辺りを支配した。その間、ハマーンは本当の自分の事を話そうかどうかずっと考えていたのだが、やがて意を決してこう言った。

「アムロ、私、貴方まだ言っていない事があるの。私、アルテイシアって名前じゃ無くて本当は……!!」

『ネオ・ジオンの指導者ハマーン・カーンなのよ!』と彼女が言おうとしたその瞬間、アムロは濃厚なキスをして会話を遮った。周りの何人もの人がその光景に気付いてニヤニヤと見ているが、そんな事はお構いなしにキスをするアムロとハマーン。やがて、ハマーンが冷静さを取り戻したと思った頃、アムロは唇を離してこう囁いた。

「ここは戦場じゃないんだ。話したくない事を無理に話す必要は無いんだよ……アル」

「アムロ……」

「世の中、知らなければ幸せな事だって沢山あるさ。さっきの戦闘の時だって、僕は君の思考パターン

を読んで対処したからあんな動きが出来たけど、それ以外の事を覗かないように必死に努力したんだよ。そりゃ僕も君の事を全て知りたいさ。……でも、それ以上に今の君との関係を壊したく無いんだ。どうか僕の努力無駄にしないで欲しい……僕だけのアル……アルテイシアでいて欲しいから……」

アムロはハマーンをそっと抱き締めた。ある程度予想はしていたのだが、ハマーンは先程のゲーム中、アムロにずっと思考回路を読まれ続けていた事を改めて知って、信じられないと言う表情を浮かべた。

なぜなら以前の戦闘でカミーユに読まれた際はプライベートな事まで全て覗かれてしまったからだった。それ以降の彼女は心を覗かれる兆候があれば、随時閉ざして対処していたのだが、今回はそんな気配すら感じる事は無かったのだが、それでも思考パターンを読まれていたのだった。ましてや、その行動の中でプライベートな情報だけを意図的に覗かないように遮断してしまうとは、あらゆるレベルでアムロはハマーンが叶う相手では無かった。

「もう一つ聞いていい？アムロ？」

「ん？なんだい？」

「なぜ、ガンダムにマグネットコーティングを付けなかったの？私が弱いから？」

ハマーンの間いに、アムロは少し困った表情をしながら答えた。

「いや……その……やっぱり素敵な女性の前では見栄を張りたいから……ね。まあ、真剣勝負とは言えゲームだったし、それ位はいいかな……と……」

「それだけ？」

「うん。それだけ。男なんて単純なもんだよ。アル……」

恥ずかしそうに視線を逸らすアムロにハマーンはこう言うのだった。

「アムロ……私……本気で貴方に惚れてしまいそう……」

「……アル……」

ハマーンをギュッと抱き締めるアムロ。ハマーンの頬がほんのりと染まった。二人は人目も気にせずそのまま抱き合っていたが、やがてハマーンがアムロの耳元でそっと囁いた。

「……私……また貴方が欲しくなっちゃった……」

その言葉に、アムロは優しい口調でこう答えた。

「僕も……もう今日は一緒のホテルに泊まってもいいかな……と思っただとところさ。もちろん愛し合う為
にね」

「……愛してる……」

「僕もだよ……アル……」

人目も気にせずキスをする二人。

「ゲームでは負けたけど、ベッドの上では絶対負けないんだからね……」

「ふふふつ、本当の恐怖を知るのはこれからかも知れないよ」

「じゃあ、私も本来の私を晒け出すから覚悟してね……」

「本来の私って？」

「公園で私がやってた様な事……変態的な行為の事よ。アムロもそういうのが好きって判ったし、遠慮無くプレイ出来るわ。それでしょ？」

「えっ!? まあ……そうだ……ね」

「私は根はMなんだけど、Sも一通り出来るように調教されたから……どっちにしろ楽しみにしててね。」

ア・ム・ロ」

「……何か戦う前から負けそうだよ……」

「連邦の英雄が何弱気な事言ってるのよ! さっ……行きましょ!」

「ああ……」

ハマーンはそう言うと、アムロと共に地下の駐車場へと降りていった。その後ナナイに連絡を入れて待ち合わせの予定を明日の早朝に変更した。そして二人が乗る電気自動車は、夜の繁華街へと消えて行った。

ここはサイド6……中立地帯。敵も味方も無く時を過ごせる場所……。

おわり

この小説を読む時のお願い

脳内で再生するBGMは初代ガンダム劇場版「哀戦士」や「巡りあい宇宙」もしくはTV版サントラ
では是非お願いします。